『ニーベルンゲンの歌』と伝承 (3)

岩 井 方 男

(承前)※

※「『ニーベルンゲンの歌』と伝承(2)」は『教養諸學研究』第百二十二号(2007年3月25日発行)に掲載.

2.3. ドイツ資料

§21 『ニーベルンゲンの歌』は,ニーベルンゲン伝説に基づく,当時の支配階級の文学作品であり,それを享受した階級の没落に伴い文学史の表舞台から姿を消した.しかしニーベルンゲン伝説の美しい花の一輪が枯れたとしても,伝説の根までがドイツの地から消滅したのではない.それはたくましく生き残り,次の時代の担い手のために再び別の花を咲かせた.

『角質化したザイフリートの歌』は,いわゆる大道芸人の歌Bänkelsängerliedであり,その品位は『ニーベルンゲンの歌』とは較べものにならない.しかしこの作品は,「歌謡形式による唯一のドイツのジークフリート伝承」(1) であり,歴史的価値は測り知れない.この作品は他作品と共通する部分を多く含むので多少詳しく紹介する.かっこ内の数字は詩節を示す.

○

ニーデルラントのシグムント王は王子ザイフリートが力が強く「わがまま」mutwilligなので困っている.王は顧問の意見に従い,ザイフリートを宮廷から出す(1-3).

若者は鍛冶屋に弟子入りするが,鉄床を二つに切ったり粗暴な振舞いが目立つので,親方は彼を亡きものにしようと決心する.親方はザイフリートに森に

炭を取りに行くよう命じ，実際は龍の住処に行かせる（4－7）．彼が森にやって来ると，そこには龍をはじめ多くの怪物がいた．ザイフリートはそれらに火をかけ，焼き殺してしまう．熔けた怪物たちの甲羅を身体に塗ったザイフリートは，肌が角質化した．ただし肩の間は別であった（8－10）．彼はギービヒ王の宮廷に行く．一方，小人ニーベルンゲは多くの宝を集めていたが，彼の死後三人の息子がそれを守っていた．この宝をめぐり多くの英雄が命を落とすのである（11－15）．

ライン河のほとり，ウォルムスに君臨するギービヒ王には，三人の息子とクリムヒルトKrimhiltという名の娘がいたが，彼女は龍にさらわれてしまった．王は各地に使者を立てたが，娘の行方は杳として知れなかった（16－32）．ザイフリートは龍を追い森で道に迷って小人の王オイゲル（またはオイグライン）Eugel（Eugleyn）に出会う．小人は龍退治の助力を拒むので，ザイフリートは小人王から力ずくで龍の情報を聞き出さなくてはならなかった（33－60）．

ザイフリートはまず龍の岩山に入るために，巨人クペランKuperanに扉を開けさせようとする．巨人は彼に手傷を負わされ降伏する．ザイフリートが前に立ち龍の住処に行こうとするが，後ろから巨人が殴りかかり英雄は鼻と口から血を流す．小人の王が霧の頭巾nebelkappeを彼にかぶせたので，ザイフリートは助かった．今度は巨人が前を歩き彼らは龍の住処にたどり着く（61－100）．ザイフリートを宮廷でかつて見たことがあるクリムヒルトは再会を喜ぶ．巨人は英雄に剣を手に入れさせたが，再び裏切るので殺される．やがて龍が六十匹の小龍を引き連れて帰ってくる（101－126）．

怒った龍はザイフリートらを炎で焼こうとし，二人は下の洞穴に身を隠す．小人たちはその熱に驚いて，宝物を隠し場所から移す．ザイフリートは剣で龍と戦う．龍の甲羅が熱で柔らかくなったので，英雄は龍を両断した（127－152）．感謝した小人の王は，ウォルムスまでザイフリートとクリムヒルトに同行する．道中小人は英雄の運命を星占いし，八年の余命であると告げる．ザイフリートは余命の短さを思い，自分のものとなった小人の宝をライン河に捨て

る（153－168）.

ウォルムスに帰った二人は結婚しザイフリートは善政を布く．クリムヒルトの三兄弟，ギュンテルとハーゲンとギールノートGyrnotはザイフリートを妬んだ．ザイフリートがオッテンの森Ottenwaldtの冷たい水の泉のほとりで涼んでいたところ，ハーゲンが彼の肩の間を突き刺して殺した（169－179）.

○

この作品の結末は悲劇的で，英雄は叙事詩と同じくハーゲンにより肩の間を刺されて落命するが，『ニーベルンゲンの歌』の持つ雄大感・悲壮感とは無縁である．英雄の童話的冒険（龍と美姫）が主要テーマであり，彼の宝と死は添え物のように取り扱われている．暗殺の原因はギュンテルたちの嫉妬である.

『角質化したジークフリートにまつわる素晴らしい物語』は散文による民衆本であり，その内容は，いくつかの些末なエピソードを除けば，上記の韻文『角質化したザイフリートの歌』と大きくは異ならない.[(2)]

『角質化したゾイフリート』はハンス・ザックス作（1557年）の，おそらく民衆本に取材した戯曲である．この作品には，本筋とは何の関連もなくディートリヒ伝説が混入しているが，主要な点で民衆本と重なっている．混入は興味深い事実であるが，この場では考察の対象としない．これらの民衆本系統のドイツ資料の特徴として，「ジークフリートの皮膚の角質化」「二度の龍退治」「妻の兄弟の嫉妬による暗殺」が挙げられよう.

§22 ドイツ民衆本資料においてはジークフリートの活躍が主で，ブルグント人たちはその影に隠れている．しかし，ジークフリートが登場しない他の伝説圏では，彼らもまた英雄である．民衆本の時代から五百年ほど遡るが，『ヴァルターリウスの歌』（九世紀または十世紀）には，ハガノ（すなわちハゲネ）の活躍が歌われている．このラテン語の作品は，ニーベルンゲン伝説と重なる部分もあるので，ここにあわせて紹介する．かっこ内の数字は詩行を示す.

○

パンノニアにはフン人（§９等において紹介した歴史書と同じくアヴァール人とも記されている）が住み，彼らを強大な王アッティラが治めていた．フランク人の王ギビコはトロヤ人の血を引く男の子ハガノを，ブルグントの王ヘリリクスは娘ヒルトグントを，アキタニアの王アルプヘレは息子ヴァルターリウスを人質としてフン人に差し出す．ヒルトグントとヴァルターリウスは婚約していた．この三人はアッティラの宮廷で大切に育てられた（1－115）．

ギビコが死んで息子グンターリウスGuntharius が王位についた．この知らせを聞いたハガノは，新しい王に仕えるべくアッティラの宮殿から逃げ出す．それからしばらくした宴会の最中，ヴァルターリウスとヒルトグントは財宝を持って，酔いつぶれたフン人たちの城を後にする（116－357）．アッティラは追わせようとするが，ヴァルターリウスの剛勇ぶりを知る家臣たちはすべてしり込みをした（358－427）．

グンターリウス王は，ヴァルターリウスたちが彼の領土を通過したことを知った．王は財宝を手に入れる機会を逃すまいと，ハガノならびに勇猛な家臣たちを連れて一行の後を追う（428－488）．ヴァルターリウスとヒルトグントはワスケン（ヴォージュ）の森で休んでいた．追手がフン人ではなくてネブロ・フランク人Franci nebulonesであるので，ヴァルターリウスは喜ぶ．しかしグンターリウスは使者を立て，宝とヒルトグントを引き渡すよう要求した．ハガノは王を諌めるが聞き入れられないので，あきれて岡の上で成りゆきを眺めることにする（489－639）．ヴァルターリウスはグンターリウス王との和解を欲するが，受け入れられず戦いが始まる．王の家臣はヴァルターリウスに次々と倒される．その中にはハガノの妹の息子パタフリートPatavridもいた．そして残ったのはグンターリウスのみであった（640－1061）．

そこでグンターリウスは，岡の上のハガノに助勢を頼む．彼は承諾し二人でヴァルターリウスと戦うことにする．ヴァルターリウスはハガノに和解を乞う．しかし愛する甥パタフリートを殺された彼はそれを拒否し，戦いが始まる

(1062－1279). 彼らは馬を下り徒歩で戦った. 戦いは長く続きヴァルターリウスは疲れを覚えた. そこで彼はハガノに槍を投げつけておいて, グンターリウスに切りかかる. 王は片足を切断されてそこに倒れる. ハガノは直ちに王を助けにやって来て, ヴァルターリウスの片手を切り落とす. しかし彼はヴァルターリウスにより顔の半分を失う (1280－1395).

三人は共に負傷し, ここに戦闘は終わった. ヴァルターリウスに言われて, ヒルトグントは負傷者の看護をする. ヴァルターリウスとハガノは和解し, 再び同盟を結ぶ. ハガノはグンターリウスを馬に乗せてウォルムスに帰った. ヴァルターリウスはアキタニアに帰り, ヒルトグントと結婚して幸福に暮らした (1396－1456).

○

この作品から, ハゲネとエッツェルの関係とヒルデブラントの嘲り (NL. Str.2344) の内容が理解できる. また黄金を欲しているのはグンターリウス (＝グンテル) であり, エッツェルはむしろ寛大な王である. ハゲネの思慮と主君に対する忠誠心も, この叙事詩から読み取るべきであろう.

ここでしばらく「昔の物語」の直接的素材から離れ, 若干の寄り道をして『ニーベルンゲンの歌』のいわば外側からも「昔の物語」の問題について考えたい.

２．４．文学史

§23 ある共同体の構成員たらんと欲する者は, 共同体を共同体たらしめている部分を, 他構成員と共有する必要がある. 『ニーベルンゲンの歌』の文学共同体の場合, 身分を別とすれば, 必要とされる共有部分は文学的センスであり, 文学的知識, とりわけ文学的伝統についての知識である. あるとき『ニーベルンゲンの歌』の文学共同体の構成員であった人物が, 他の機会には別の文学活動に従事したはずである. したがって, 彼は当然騎士物語などに関しても豊富な知識を持っていた. もちろんこの叙事詩の文学共同体にとっての文学的伝統は, 「昔の物語」に集約できる. しかしその内容はニーベルンゲン伝説ばかり

ではなく，過去から同時代にかけてのより広い文化的伝統をも含んでいたに違いない.[3]

『ニーベルンゲンの歌』においては二箇所，月は星と対比され，美しい男女の比喩として用いられれている.

その輝きが雲間から現れる明るい月が，星たちを圧するがごとく，彼女（＝クリエムヒルト）は今や多くの美しい婦人たちの前に立っていた.

Sam der liehte mâne　　vor den sternen stât,
des scîn sô lûterlîche　　ab den wolken gât,
dem stuont si nu gelîche　　vor maneger frouwen guot.

（Str.283,1f,）

同様の比喩を用いて，クリエムヒルトは夫ジーフリトの素晴らしさを讃えている（Str.817,3）．しかしこの比喩は，『ニーベルンゲンの歌』の独占物ではない．フォーゲルヴァイデのヴァルターはある詩の一節で，供をつれた美しい婦人を「星たちの前の太陽のごとく」alsam der sunne gegen den sternen stât（Walther L.-K.46,15）と描写している．一方は「月」他方は「太陽」に擬せられているが，これは他の婦人たちの顔色を無からしめるほどの美人の，比喩的表現の典型である．ヴィルマンスWilhelm Wilmannsやテルフォーレン Helmut Tervooren などが挙げている豊富な例を見ると，このような比喩は，むしろ西欧中世文学全体の伝統であったと考えられる[4].

無論この一例をもって，『ニーベルンゲンの歌』の文学共同体の文学的素養を云々するわけにはいかない．構成員たちの中にはこの比喩を既に知っていた者もいたであろうが，またそれを新鮮に感じた者もいたはずである．しかし共同体全体のレベルを考えると，彼らはヨーロッパの同時代の文学のみならず，古典からも多くの養分を吸い上げていた，と考えざるをえない.

その傍証として，『ニーベルンゲンの歌』におけるモチーフが，他作品との

共通性を有しているという事実を確認する．フレンツェルElisabeth Frenzelは，『ニーベルンゲンの歌』の中に十一のモチーフの存在を認めている．[5] それはすなわち，「血讐」，「恥をかかされた女性」，「求婚者に課せられた試練」，「友情の証」，「傷つけられた夫の名誉」，「金銭欲」，「神明裁判」，「島に住む人」，「二人の女性を愛する男」，「裏切り者」，「予言・幻視・予知夢」である．

例えば血讐Blutrache（近親者による仇討ち）は，警察権の発達していない社会においては認められていた慣習である．『ニーベルンゲンの歌』においては，クリエムヒルトが夫（血縁ではない）ジーフリトの仇を討つが，これはおそらく時代的特徴であり，クリエムヒルトの行為も血讐の一種と見なしてよい．ニーベルンゲン伝説に基づく他作品においては，女性が自分の父親あるいは兄弟の仇討ち（すなわち血讐）を行う筋立てになっていることから，それは明らかである．このモチーフは，例えばギリシア神話においてはアトレウス家の悲劇（不義をはたらき父を殺した母クリタイメストラに対する，息子オレストの仇討ち）に顕著に現れる．『ニーベルンゲンの歌』と同時代の作品にも，血讐の例は事欠かない．『トリスタン』においては，トリスタンは父の仇を討ち，イゾルデは伯父の仇討ちを試みる．

血讐以外のモチーフを取り扱うことは控えるが，各モチーフについて，それを共有する古典と同時代作品の例を挙げるのは容易である．もちろん，文学共同体がそれらの作品のすべてを知っていたと主張するつもりはない．しかし，共同体構成員たちは，少なくとも同時代の作品のいくつかを知っていたであろうし，また，『ニーベルンゲンの歌』に現れるモチーフを契機として，他の作品あるいは他の伝承へと想像の翼を広げていった可能性も存在する．そして更に，文学共同体が他の作品と『ニーベルンゲンの歌』に共通して見いだしたモチーフは，上述の十一に限られるわけではあるまい．例えば臣下のめぐらす策略も，中世文学には非常に好まれたモチーフであった[6]．『ニーベルンゲンの歌』の文学共同体構成員たちの文学的素養は，けっして過小評価すべきではない．

ただし，モチーフの取り扱いには慎重を期す必要がある．物語中のどの出来事がどのモチーフに相当するのかを決定するのは簡単ではないし，議論の対象を明確に限定しないと，最終的には世界文学を論じなくてはならないからである．本論文はそのような場ではない．むしろ，この叙事詩の詩人/朗唱者は，ニーベルンゲン伝説の上に，享受者たちにも知られていたに違いないモチーフを巧みにちりばめているという事実を重視すべきである．また『ニーベルンゲンの歌』には，トポスも予型論も効果的に使われている．これもまた「昔の物語」の一部である．

共有された知識は共同体の結束を固めた．自分たちは他の無教養者とは異なるという意識がまず存在し，既に知っている伝説なりモチーフが，『ニーベルンゲンの歌』の中でどのように組み合わされるのか，どのような局面に登場するのか．作品朗唱を前にして享受者たちは期待に震えたに違いない．またその期待は確実に詩人/朗唱者に伝わった．このような条件下では，文学を媒介とした一種の秘儀集団が成立したとしても不思議ではない．

３．まとめ　― 多様性 ―

§24　宮廷人たちが既に有していて，いま『ニーベルンゲンの歌』として享受者の前でよみがえろうとする過去．それは文学共同体を共同体たらしめるために，「昔の物語」として知識の形で構成員に共有されていた．その内容のすべてが，「１．歴史上の事件と史書」および「２．現存文学作品と伝承」における記述の埒内に納まる保証は存在しないが，現状ではこれ以外の場所から「昔の物語」を考察する材料を集めるのは不可能であるし不要であろう．これを前提として，「昔の物語」の内容についてまとめる．ただし，「昔の物語」の全領域を考察の対象とするには範囲が広すぎるので，叙事詩前半部の主人公であるジーフリトに相当する人物およびその関連事項を現存文学作品の視点から取り上げる(7)．

単純化のため，英雄の両親・生い立ち・身分・冒険・女性・非業の死，の六

要点に着目し，それを伝承横断的に概観する．ただしこれらは相互に絡まりあっており，その絡まり方は各伝承において異なる．

まず英雄の両親である．モデルが歴史上の人物であるかぎり，両親の存在は所与の条件であり，変えようがない．しかし文学作品になると様相は一変する．中世人の思考に「発展」は存在せず，凡人は努力しても英雄になりえない．したがって，英雄の父もまた英雄であり，身分は王である．形態はさまざまであるが，英雄が王家の血筋を引くことは間違いない（岩井「『ニーベルンゲンの歌』と時間（1）」参照）．

ところがここに一つの問題が生じる．父の側から眺めると，父権社会における息子は簒奪者として最も身近な敵である．とりわけ親子が英雄であると，両者は並び立たない．その極端な例が『ヒルデブラントの歌』であり，周知のごとく両者は殺し合う．しかしゲルマン人の伝統的社会においては，父と息子はどちらも欠くことができない．自力救済が旨とされる社会の場合，父にとり息子は共に敵と戦う最も身近な味方である．すなわち，倒された父の復讐者の第一候補は息子である．したがって成人した息子の存在は，犯罪の抑止力としての機能を有する．そのような社会において，成人した息子を持たない人物は，容易に殺害の対象になりうることすらあり，かなり惨めな存在であるといわざるをえない．また，生産性の低い時代において，人が自由人たるべく財産を手に入れる最も一般的な手段は遺産相続であり，その意味では，しかるべき父親を持たない息子もまた惨めな存在である．[8]

共存は困難であるが相互に不可欠であるという父子間の矛盾を，アイスランドの伝承においては，息子の幼少時における父の戦死という形で解決している．そして更にもう一つの要素が導入されて，この解決は確実になる．すなわち，養父と養子の関係である．アイスランド語のfóstri（英語foster参照）は養父，養子，養子として育てられた乳兄弟を表す．この語ないしその関連語は，『エッダ歌謡集』においても数回その姿を現す．「レギンはシグルズを養育し彼に教育を施した」Reginn veitti Sigurði fóstr ok kenslu（Rm.pr）．これは男性ばか

りではなく，ブリュンヒルドについても「ヘイミの養女」fóstra Heimi（Grp.29 usw.）と呼ばれている．ただしこの語は，異なる身分間でも用いられたらしい．例えば「シグルズの短い歌」の第70詩節において，死にゆくブリュンヒルドがfóstrman mitt / oc faðerniと言う．このとき，前半詩行と後半詩行は並列されていると考えられる．fóstrman mittは，これに先行する「五人の乙女，八人の召使」を総括した語であるから，もしfaðerniが「父の遺産」であるとすれば，fóstrmanもそれと対応する財産でなければなるまい．するとこの語が表す人物は，乳兄弟（姉妹）として育てられているが，彼女から見ると身分の低い人物である可能性がある．したがって，fóstrにかかわる人物の身分は多様であるが，アイスランドにおいては，この地の古来の習慣が巧みに伝承に組み入れられている．(9)『エッダ歌謡集』においては，英雄は養父から知恵と業を与えられ，息子の最初の冒険は父との争いではなくて，亡き実父の仇討ちとなっている．『シズレクのサガ』においては，捨て子のモティーフが更に加えられている．英雄は養父に出会う前に水の中に捨てられ，「宇宙的元素の恣意」(10) に委ねられて大地母神の力を獲得する．

ドイツ資料においては，父を王として在位させたまま背景に押し込めることにより，父子関係の矛盾を解決する．または息子が宮廷を出て，父との直接対決が回避される．このような敵対的関係が見られる中で，異彩を放つのが『ベーオウルフ』における両雄の取り扱いである．オジはオイの不在の間に龍退治をする．両雄並び立たず，この場合はオジがオイを出し抜いたと考えられなくもない．しかし，それにもかかわらず両者は「戦友」である．兄妹相姦によって生まれたシンフィヨトリ，人狼としての生活と復讐（『ヴォルスング一族のサガ』），義母に毒殺されたシンフィヨトリを抱くシグルズ．このようなアイスランド伝承の陰惨な父と息子像に比べると，この古英語の叙事詩の世界が，いかに平和であるかが理解されよう．(11) ただし『ベーオウルフ』におけるがごときオジ/オイ関係が，シグルドとシグルズの関係の始源的形態であるという保証はない．ホープスJohannes Hoopsはオジ/オイ関係を父子関係に先行すると

考えているのであろうか，『ベーオウルフ』の段階においては，英雄の息子の存在がいまだ知られていなかった，と論じている．しかしこの作品は，クレーバー Johannes Klaeberの指摘を俟つまでもなく，非常にキリスト教色が強い．[12] したがって，この叙事詩の詩人は，アイスランドに残されたごとき悲劇的父子関係に耐えられず，両雄を父子からオジ/オイ関係に変化させた可能性を否定できないのである．

§25 英雄の両親と密接に関連するのが身分である．そもそも英雄は親の七光りとは無縁の存在であり，父の庇護から離れてこそ英雄である．しかしそれは同時に，父親からの遺産相続を困難とし，親の身分からの離脱という危険を孕む．先述のとおり，アイスランド伝承には巧みな便法があって，英雄は養父の援助や教唆によって財産を手に入れる．しかし，彼の身分は依然不安定であり，例えば龍との戦いにおいても，絶えず身分を確認せざるをえない（「ファーヴニルの歌」参照）．このように身分確認は常に繰り返され，『エッダ歌謡集』と『ヴォルスング一族のサガ』に見られる英雄の身分へのこだわりは異様とすら現代人には感じられよう．龍との戦い（困難の克服）で彼が手に入れたのは，鳥の言葉の理解力（すなわち知恵）と財宝であり，この段階で彼は自立可能になる．養父を捨て，あるいは殺害して，英雄は自分の力で世間に乗り出す．

宮廷を出奔するドイツの英雄の場合は，その出奔の理由が語られなければならない．民衆本の世界では，英雄は粗暴で宮廷には受け入れられず鍛冶屋に奉公する．エリアーデに倣えば，この時点で幼児は火に接近してその力を手に入れることになるが，若き英雄が英雄にふさわしい力を得るための冒険には，二つの段階が認められる．民衆本では第一回目の冒険において，英雄は龍を剣や槍のごとき攻撃的な武器によって殺すのではない．騎士であれば怪物と正面から戦うであろうが，彼は怪物たちに火をつけて焼き殺す．そして焼き殺しをとおして手に入れた彼の特性は，皮膚の角質化であった．プロス Emil Ernst Plossは，この不死身の英雄を甲殻鎧Hornpanzerを身につけた戦士として，歴史的

考古学的観点を英雄伝説研究に持ち込むように勧めている.[13] これはそれ自体興味深い観点であるが，むしろ英雄が熱により怪物の甲羅を熔かした点に注目したい．鍛冶屋（王侯身分からかけ離れた存在！）を強く連想させる火により，彼は守備に役立つ固い皮膚を得た．この皮膚は攻撃には用いられない．主人公は二回目の冒険で剣を手に入れ，この段階を経過して，やっと攻撃に移るだけの力を得るに至る．ただしデンマーク資料によると，この段階において，既に英雄は殺害されてしまっている．『ベーオウルフ』の龍は自分の熱で熔けてしまうが，当該箇所が断片的であるので，これ以上の議論は不可能である．

アイスランドとドイツの資料群を観察するかぎり，本来，龍殺しの英雄の身分は低かったのではないかと疑わざるをえない.[14] もしそのように考えないと，北欧における身分への執拗なまでのこだわりや，ドイツにおける鍛冶屋との結びつきの，合理的な説明は非常に困難である．その名残はもちろん宮廷叙事詩たる『ニーベルンゲンの歌』にも反映している．この作品において，英雄の身分の低さは，例えばジーフリトがグンテル求婚を手伝う際に王の鐙取りをする場面，彼がクリエムヒルトに長い間求婚できなかった事実，アルベリヒの髭を引っ張るジーフリトの滑稽な側面，プリュンヒルトがジーフリトを見下す箇所，そしてハゲネによる郭公の比喩などに，間接的ではあるが明瞭に現れている．

英雄にふさわしい力を得る冒険に続くのが，身分の高い女性を手に入れるための冒険である．彼女の居所は炎に囲まれた山または厳重な城，あるいは龍の巣である．『ニーベルンゲンの歌』のごとく，その女性自身が困難な条件を提示している場合もある．ドイツの民衆本ではその女性と英雄は結婚し，信頼していたはずの彼女の親族により英雄は殺される．アイスランドの伝承および『ニーベルンゲンの歌』においては，もう一人の女性が登場し，英雄はこちらの女性と結婚してしまう．ここに二人の女性の葛藤が生じ，それに巻き込まれた英雄は，民衆本と同様に妻の親族により殺害される．

§26 ジークフリートおよびその周辺に限って，「昔の物語」として考えられる資料を概観しても，そのバリエーションの豊かさにはまことに驚嘆させられる．よって，他の登場人物や他の事柄まで考慮すると，「昔の物語」の内容は極めて多種多様であることが予想できる．しかも重ねて言うが，先に検討した作品は，現存の作品であることを忘れてはならない．これ以外に，今は伝わっていない作品も少なからず存在したに違いないし，その背後には，更にまた別の伝説が存在した可能性すらある．[15] それらは人びとの記憶の中に生きているがゆえに，内容・形式共に流動的かつ恣意的であり，相互に矛盾したとしても不思議はない．また歴史についても同様である．既に，その核となる出来事が単一の歴史上の事件であっても，そこから生じる伝承にはさまざまなバリエーションがあることも確認した．[16] 前述（§9）のとおり，物語が伝説の状態にあるときには極めて流動的であるから，これは当然である．

更に，このようなバリエーションが，ある一つの物語が分岐する過程で生じたという保証も存在しない．別系統の物語が，影響し合ってある種のまとまりが生じたのかもしれないのである．この豊富なバリエーションの存在を合理的に理解するには，考え方を逆転させて，『ニーベルンゲンの歌』の「昔の物語」には，歴史的であれ文学的であれ，統一性は存在しなかったと考えるべきではなかろうか．[17] むしろ，統一性の不在が「昔の物語」の本質の一部をなす，とすら言えるであろう．

「昔の物語」の在処は文学共同体構成員個人の記憶である．構成員はいつかあるところで，ある昔の物語を知った．その物語には，記録者の思い違い等を除くと矛盾は存在せず，一つの作品として完結している．しかし同じ構成員が別の機会に，今まで知っていた物語と似てはいるが，内容がいささか異なる物語を聞かされた可能性がある．彼は疑問を抱いたまま，享受の場に臨んだであろう．もちろん，構成員間で「昔の物語」についての知識が等しいという保証もない．構成員一人一人が，自分の「昔の物語」を持っていた．

するとここにおいて，文学共同体のあり方に関して新たな疑問が生じる．

ニーベルンゲン伝説という核になる知識は共有していたにせよ，多様な知識を有する構成体個人のぶつかり合う場としての文学共同体で，一体何が起こったのか．個人が文学共同体に参加し，詩人/朗唱者の語る「昔の物語」を聞くことはどのような意味を持ったのであろうか．多様な知識を持つ文学共同体を前にして，詩人/朗唱者は一体何を目的として『ニーベルンゲンの歌』の「昔の物語」として語ったのであろうか．

次号以降，これらの問を出発点とし，『ニーベルンゲンの歌』成立の同時代的事件を手掛かりとして考察を進める．

注

(1) Kroes, Hendrik Willem Jan: Untersuchngen über das Lied vom Hürnen Seyfrid, mit Berücksichtigung − der verwandten Überlieferungen − . Gouda（Zonen）1924, S.8.

(2) 韻文作品と散文作品における登場人物の相違対照は，『ラーレ人物語　不死身のジークフリート』大澤峯雄，櫻井春隆訳（国書刊行会）1987年，280ページの対照表参照のこと．

(3) ニーベルンゲン伝説の外にも目を向けるとなると，全人類的規模でひろがる英雄伝説の存在は無視できない．そこまで議論を拡大しなくとも，いわゆるゲルマン英雄伝説とギリシアの英雄伝説の関係についても同様である（Vgl. Chadwick, H. Munro: The Heroic Age. Cambridge 1912（Rpr.1967）, bes.Chap. XV.）．現在の私には，Heroic Ageなる媒介変数の導入によってこの問題が解決できる，と断言するだけの判断材料がない．また，ギリシアの影響が在ったと断言するのには勇気がいるが，無かったと断言するには更に大きな勇気を必要とする．これらの議論の背景にはヘーゲルの『美学講義』の影が見えており，私にはそこまで遡る力はない．

(4) Vgl. Tervooren, Helmut: Schönheitsbeschreibung und Gattungsethik in der mhd. Lyrik. In: Stemmler, Theo（Hrsg.）: Schöne Frauen − Schöne Männer. Literarische Schönheitsbeschreibungen. 2. Kolloquium der Forschungsstelle für europäische Literatur des Mittelalers. Tübingen（Narr）1988.; Die Gedichte Walthers von der Vogelweide Studienausgabe.（Unverändert gedruckt nach der Ausgabe „Die Gedichte Walthers von der Vogelweide“. Hrsg. von Karl Lachmann, Carl von Kraus, neu hrsg. von Hugo Kuhn 1965）Berlin（de Gruyter）1965［以下，Walther L.-K.と略記］; Walther von der Vogelweide. Hrsg. und erklärt von W. Wilmanns. 4., vollständig umgearbeitete Aufl. Besorgt von Viktor Michels. Halle a.S.（Waisenhaus）1924（Germanistische Handbibliothek I,2）, S.199. なお，引用箇所（Walther L.-K.46,15）において，sunne（=Sonne）は男性名詞．

(5) Frenzel, Elisabeth: Motive der Weltliteratur. Ein Lexikon dichtungsgeschichtlicher Längsschnitte. 3. überarbeitete und erweiterte Aufl. Stuttgart（Kröner）1988［以下，Frenzel と略記］. 当該箇所は1. から11. まで，それぞれS.67f., S.165, S.192, S.203, S.223, S.269, S.303, S.385, S.501, S.792, S.808, S.825.

(6) Vgl. Semmler, Hartmut: Listmotive in der mittelalterlichen Literatur. Berlin（Schmidt）1991（Philologische Studien und Quellen Heft 22）. 英雄の放浪もまた他作品に多く見られるが，モチーフとして捉えるのは問題を矮小化することになろう.

(7) 『ニーベルンゲンの歌』から離れるので，暫時ジークフリートという.「歴史」からの考察は§10参照.

(8) 父親の財産を受け継がない子は，経済的だけでなく身分上も惨めな生活を送らなくてはならない.『ヒルデブラントの歌』第22詩行のarbeo laosaはその惨めさを暗示しているのであろう.

(9) Laxdœla sagaにおけるÓláfr pái Hǫskuldssonは奴隷の子であったが，父親にかわいがられた．ところがあるとき，父親は彼を養子に出す．しかしそれは，正妻や嫡出子に分与するはずの財産を損なわなずに（すなわち彼らの嫉妬を蒙らないで），庶子である愛息に財産を与え教育を施す手段であった．このように養子制度は財産（遺産）とも関係があるようで，極めて興味深い．なお非常に可愛がっている動物に対しても擬似的親子関係を想定したらしく，Hrafnkels sagaには愛馬に対してfóstrを用いた例がある.

(10) Eliade, Mircea：Die Religionen und das Heilige. Elemente der Religionsgeschichte. Ffm.（Insel）1986, S.286.

(11) 議論の本筋からは外れるが，この叙事詩には，ある登場人物がベーオウルフを「息子として慈しみたい」for sunu wylle ‖ frêogan on ferhte（Beow. V.947bf.）とすら述べる．これは，ゲルマン人における父と息子の一つのあり方として，検討の対象となるであろう.『ヴォルスング一族のサガ』第八章において，シグルズは自分より力の強くなったシンフォトリに飛びかかり，（狼の姿であったので）噛みつく．これもまた，ある種の父子関係を象徴しているのかもしれない.

(12) Hoops, Johannes: Kommentar zum Beowulf. 2., unveränderte Aufl. Heidelberg（Winter）1965, S.111［以下，Hoops 1965と略記］; Klaeber, Friedrich: Die christlichen elemente im Beowulf. In: Anglia 35, 1912, S.111-139, S.249-270, S.453-482.

(13) Ploss, Emil Ernst: Siegfried-Sigurd, Der Dachenkämpfer. Untersuchungen zur germanisch-deutschen Heldensage, Köln/Graz（Böhlau）1966, S.9.

(14) 英雄の属した身分は，『ニーベルンゲンの歌』が作品として成立・記録された時代になると，伝説の成立した時代に比して相対的低くなったのではないか，と私は想像している．ただしこれはあくまで想像であって，実証する段階には未だ至らない.

(15) Vgl. Kuhn, Hans: Heldensage vor und außerhalb der Dichtung. In: Edda, Skalden, Saga. Festschr. zum 70. Geburtstag von Felix Genzmer. Heidelberg（Winter）1952, S.262-278.

(Auch: Ders., Kleine Schriften Bd.2. Berlin 1971, S.102-118). 文学のみに限定していては，『ニーベルンゲンの歌』における「昔」は理解できない．この点でホイスラーの研究の大きな前提は崩れている，と私は考える．

(16) ただし伝説の矛盾をすべて成立時に還元する説には，必ずしも賛成できない．一つの出来事から一つの伝説しか生まれない可能性も否定できないからである．

(17) 伝承における統一性の不在を受け入れると，二十世紀を長い間支配した『ニーベルンゲンの歌』の成立史研究は，いかにそれが精緻に組み立てられていようとも，意味を失うことになる．統一性の不在は各作品（歴史も含む）の個性の表出であり，豊かな創造力（想像力）が存在する証である．